

アルテアの魔女

Final

たつみ暁

『アルテアの魔女』Final 目次

番外編再録集

5

300字SS番外編

65

登場人物設定資料

83

エピソード

103

真のあとがき

138



番外編再録集

イベントで配布したペーパーや無料冊子に収録、またはアンソロジーや企画に寄稿した番外編を再録しました。

発行順に沿っているので、物語内の時系列としてはバラバラです。

前日譚『いつか見た夢』

視界の端で黒い三つ編みが揺れた。

見覚えが無いはずなのに、何故か懐かしさに胸を締めつけられ、そちらを振り向き、懸命に手を伸ばす。だが、足は凍りついたように先へ進まず、指が毛先をかする事すらかなわない。

知らないはずの名前を呼ぼうと口を開きかけても、出て来るのは喘ぐような呼吸ばかり。ぶわり、涙が溢れ出す。黒の姿が霞んでゆく。

力の限りの嘆きを音にして、そこで世界はぶつりと途切れた。

窓の外から差し込んで来る朝日が、ゆるゆると意識を現実に戻してゆく。若草色の瞳をぱちくりとまたたかせ、少女は夢から覚醒した。

「おはようございます、エン・レイ姫様」

十年慣れた侍女頭が、姫の目覚めに応じ部屋に入って来て、優雅な所作で頭を下げる。エン・レイと呼ばれた少女は、白い寝間着姿のままベッドの上で身を起こし、そしてやけに頬が冷たい事に気づいて、両手を当てた。

頬は濡れていた。まるで思い切り泣き叫んだ後のように。

「まあ、まあ、姫様。哀しい夢でもご覧になりました？」

侍女頭が、困ったように眉根を寄せて小首を傾げる。

「……わかりません」

エン・レイは手の甲で涙を拭いながらそう応えた。最前まで、何かひどく心惹かれる夢を見ていたような気がするが、全く思い出せない。眠りの世界の光景は、空くうに溶けるように霧散して、たしかな思いを一切残さなかったのだ。

実はそういう事がよくある。胸が苦しくなるような誰かの記憶を追いかけて目が覚め、そうしてしゃぼん玉のごとくあつという間に消えてしまう事が。

夢だと思つて特段気にしないように努めてきた。だが最近、その頻度が増したような気がする。自分は、何か大切な事を忘れているのではないか。そんな予感がエン・レイの胸をよぎり、窓の外の光を見やつて、彼女は静かな吐息をついた。

その予感と向き合う日が、一步一步静かに近づいている事も、まだ知らずに。

前日譚2 『その頃彼は』

それはいつものように、インシオンと彼の率いる遊撃隊が、人に害をなす異形『破獣』カイヅを退治して、街に戻った夕刻だった。

人々は口々にインシオンを讃える言葉をのぼらせ、街の長はにこにこ顔で、謝礼のリド硬貨が詰まった革袋をこちらの手に握らせる。だが、その笑顔の裏に、恐れが同居している事を見破れないほど、インシオンは鈍い人間ではない。

戦場で容赦無い戦いぶりを見せる『黒の死神』の二つ名は、祖国イシャナだけでなく、冷戦状態の隣国セアクまで遠く響き、人々を畏怖させる。

しかしインシオン本人は、敢えてその印象を払拭しようとは思わない。必要以上に他人と距離を詰めない、それが彼の信条だ。心に移せば、自分の素性を知った相手が必ず浮かべる表情を見た時に、傷つくに決まっている。それならば、最初から隔たりの壁を作り、誰も近づけなければ良い。遊撃隊の部下達とも、最低限の心の幅を保っていれば良い。誰も必要以上に傷つかないで済む。

だからインシオンは、上っ面だけの笑顔と賞賛を送る人々に、軽く頭を下げるだけのそっけない応じ方をする。笑い方など、とうの昔に忘れた。

挨拶もそこそこに、その場を立ち去ろうとした時。

「えいゆうさま」

腰のあたりから聴こえて来た高い声に、ふっと視線を下ろす。生来目つきが悪いとはいえ、鋭い眼光に射抜かれてびくりと肩を震わせたのは、六、七歳くらいの少女だった。

少女は怯みながらも、一度、二度、目を閉じ深呼吸をして己を落ち着かせると、エメラルド緑柱石のような瞳を潤ませて、手にした小さな花束を、こちらに向けて差し出した。

「このまちをまもってくれて、ありがとうございます」

まだ緊張しているのだろう。インシオンの瞳と同じ赤い花を中心にした花束は、小刻みに揺れている。

『死神』ならば、無視してはねのける事もできただろう。だが、小さく震える華奢な肩に、今にも涙をこぼしそうな緑の瞳に、とある少女の姿が重なって見えて、インシオンの視界は一瞬ぶれ、耳の奥で幻聴が響いた。

『インシオン！』

自分を慕って、いつでも飛びついて甘えて来た幼い娘。あの頃の彼女も、目の前の少女と同じくらいの歳だった。

自然に膝を折る。少女と同じ目線の高さにまで身を屈めて、花束に手を伸ばす。

ありがとう、の一言も無い仏頂面のまま花を受け取る。だが、少女にはそれで充分だったようだ。ぱつと顔色が明るくなり、にっこりと笑みをひらめかせる。

それは、大人達とは違ふ、心底からの喜びの感情を呑めていて、いつも何にも動かされる事のほとんど無い心が、揺らぎを覚える。泉が湧くように思い出すものがある。

『インシオン、だいすき!』

すつ転んで泥だらけになり、膝をすりむいて泣いている所に、頭を撫でて慰めてやると、彼女は若草色の瞳を潤ませながらも、満面の笑みを浮かべてしがみついて来た。

あれだけのまつすぐな好意を自分に向けてくれる人間は、もういないだろう。赤い花束をほんやりと見つめながら、英雄の名を持つ青年は、もう記憶の彼方へ大分薄れてしまった、輝かしい笑顔を見せる赤銀髪の幼い姿を、脳裏に思い描くのだった。

美しく成長した彼女との邂逅がもうすぐ待つ事も、その時はまだ知らずに。

番外編『アイスクリーム・パニック』

とある夏の一日。街についたインシオン遊撃隊は、例によってインシオンとエレ、シャンメルとリリムに分かれて買物をした。

そうして、時間が余ったエレ達は、いつものごとく待ち合わせ場所で、シャンメル達が来るのを待ちぼうけする事になったのである。

北国セアク育ちであるエレに、イシヤナの真夏の日差しはかなりきつい。木陰にいても、じりじりとした熱は体力を奪ってゆく。

(これは、宿に着いたらすぐにお風呂に入らないといけませんね)

背中に伝い落ちる汗を感じ、濡れた前髪が張り付いた額を拭った時。

「……おい」

ぶつきらぼうな声と共に、眼前にぬっと、ワッフルコーンに乗ったアイスクリームが差し出された。顔を上げれば、赤い瞳を細めたインシオンがこちらを見下ろして、アイスクリームを更はずいと押しつける。

「暑いんだろ。食え」

「……ありがとうございます」

エレが弱っているのを察して、いつの間にか買ってきて来てくれたらしい。のろのろと両手を伸ばして受け取り、アイスクリームを軽く舐める。たちまちひんやりとした感覚が舌に触れた。

アイスクリームは、ミントをベースにした中にチョコレートチップをまぶした、チョコミントなるものであった。ミントの爽やかさがアイスクリームの冷たさと相まって、身体の熱を冷やしてくれて、時折口の中で転がるチップの甘みが一層引き立てられる。

年間を通してほとんど気温が高くなる事の無い、故郷の首都レンハストでは、好き好んで氷菓子を食す事など無かった。だが、この暑さの中食べるアイスクリームは格別だ。うっかりゆるみかけた頬に気づいて、慌てて真顔に戻り、エレはふつと隣に立つ人の顔を見上げた。

エレにアイスクリームを買って来たインシオンはしかし、自らは何も口にせず、いつも通り腕を組んで眉間に皺を寄せ、木にもたれかかって黙りこくっている。

「あ、あの。インシオンは食べないのですか？」

自分だけ彼の厚意に甘えて、冷たくて美味しい思いをしているのが申し訳なく、おずおずと訊ねると、赤の瞳がところちらを向いて、「別に」とこれまたやはりいつものようにそっけなく返された。

「俺は暑いのも寒いのも慣れてる。これくらいでへばったりしねえ」
そうして、その瞳が呆れたように細められる。

「それとも何だ。お前は俺がわーいアイスだーってあほみたいにはしゃぐところでも見てえのか？」
「……それは、嫌ですね……」

エレはひきつった笑いを返す。たしかに、『黒の死神』の異名を持つ英雄が、無邪気な少年のごとく嬉しそうにアイスクリームにがつつくのを目にしたら、エレだけでなくそれを目にした全員の、インシオンのイメージがガタ崩れになるだろう。

それに、この炎天下でも彼は長袖の黒装束を決して脱がない。温度差に鈍感なのか、実はやせ我慢か。それとも、『神の血』であらゆる傷が癒える彼は、今までに負ったはずの怪我が傷跡ひとつ残されていない身体を、何も知らない一般人の目にさらして、恐れられる事を避けたいのか。答えは彼自身しか知らないし、わざわざ問いつめて、機嫌を損ねるような真似はしたくない。ひとつ息をついて手元のアイスクリームに目を戻した時。

「まあたしかに、美味そうではあるよな」

そんな台詞と共に黒服の手が伸びて来て、エレの手を取ったかと思うと、インシオンが自分の口元にアイスクリームを寄せて。

一口、かじりついた。

「……ああ、美味いな」

インシオンの顔が離れ、手が離れてゆく。しかしエレの手は、中途半端な位置で固まってしま

った。

エレが口をつけていたアイスクリームに、インシオンがかじりついた。それはすなわち、セアクで女官達がきやつきやと恋愛話に花を咲かせる時に出て来た、『間接キス』なるものではないだろうか。

『でも、姫様がご体験するものではありませんよね』

女官の一人が気恥ずかしそうに語って、周りの者達も大いに賛同していたのを思い出す。たしかに仮にも姫。口づけどころか、口をつけるものを男性と共有するだけで、大問題になってしまう。

それを今、目の前のこの人は何の躊躇いも無しにやってのけたのだ。

(え。これ完全に間接キスですよ。ていうかどうすればいいんですかこれこの後どうすれば) たちまちエレの思考は脳内を飛び出して、斜め上でぐるぐる回り始める。

インシオンは何とも思っていないのか、再び腕を組んで木によっかかっている。本当にこの人は何故たまに、こうもデリカシーに欠ける言動を平気で取るのか。

(おじさんだからですか？ 三十路目前のおじさんだから、恥じらいとか無くなっていくんですか!?)

本人が聞いたなら「おっさんじゃねえ」と不機嫌極まり無い顔で反駁しそうな論理を展開しつつ、

エレの混乱は極みに達する。

「おい、溶けるぞ」

ぐるぐる考え込んでいると、呆れ気味の声が降って来たので、エレの意識は現実には立ち返った。慌てて手元を見れば、チョコミンントの表面が大分ゆるくなつて、形が崩れ始めている。

折角インシオンが買つて来てくれたアイスクリームを無駄にする訳にはいかない。だがしかし、彼が口をつけたものの続きをエレが食べる事は、ゆゆしき事態であり、と、再び思考が混迷に陥りかける。

悩んだ末にエレが取った行動は、大口あけてぱくりと再びアイスクリームに食らいつく事であった。

(そうです、意識するから変な気持ちになるんです。何て事無いんです何て事)

がつつと、姫にあるまじき形相でアイスクリームからワツフルコーンまで勢い良く食べるエレを、インシオンが呆れ気味の表情で見下ろして、「そんなにながつつかなくても全部取つたりしねえよ」とぼやいたのだが。

(そもそも誰がそうさせたんですか、誰が！)

冷えたはずの頬を上気させながら、エレは無言でアイスクリームを頬張り続ける。

エレがそこまで動揺した理由。それを自覚できないほど、彼女は最早鈍感ではない。だがその

想いを相手に伝えられるほどの勇氣は、まだ彼女に備わっていないのであった。

二〇一五年十二月三〇日 コミックマーケット89 ペーパー掲載

『二期一会で終わらせない』

それは、イシヤナ王都へ向かう途上、インシオン遊撃隊がとある宿場町に辿り着いた日の夕刻だった。

「インシオン？ インシオンじゃあないかい！」

宿を指して通りを歩いていたところ、斜め後方から、やや威勢の良い声をかけられて、先頭を行くインシオンが足を止め、長い三つ編みを揺らしながら振り返った。つられてエレも立ち止まり、声の方を向く。

気風の良さそうな顔立ちをした、四十路目前と思われる紫髪の女性が、黒い瞳を細めて懐かしそうにインシオンを見つめていた。

エレやシャンメル、リリムにソキウス、遊撃隊の面々が見守る中、インシオンは、相手の名前を思い出そうとしているのだろう、眉根を寄せながら彼女の元へ近づき、赤い瞳で高い目線から彼女を見下ろして、呟くように名を呼んだ。

「……アーシャ」

「無愛想な所は相変わらずだねえ」

途端に女性は、整った顔に人懐っこい笑みを浮かべると、女性にしては大きな手で、ぼしんとインシオンの肩をひとつ叩いた。

天下の英雄『黒の死神』を前にしてにも臆さない度胸と、インシオンに気安く声をかけるような女性がいた事実。その双方に驚いて、エレは言葉を失い、翠の瞳を点にして立ち尽くしてしまふ。すると、女性の双眸がところちらを向き、値踏みするようにエレ達四人を眺め回した。

「今はこれだけいるのかい」

アーシャと呼ばれた女性は、興味深そうに目をすがめると、インシオンの手を両手でぎゅっと包み込み、何だか必要以上に彼に近づいて、ぽんぽんとまくし立てる。

「今日の宿は決まってるのかい？ 良かったらあたしの所に泊まって行きな。今はこの町で旅籠はたごをしてるんだ。勿論、実入りの良い英雄様からは、しっかりお代はいただくよ」

「相変わらず抜け目は無いな」

インシオンが深々と溜息をつき、長い前髪が吹き上げられる。それは彼が観念した証だと、ここ数週間道を共にしただけの付き合いだが、エレにももうわかるようになっていた。

「決まりだね」

アーシャが白い歯を見せて、「さ、こつちだよ」とインシオンの手を引く。引かれるままに歩き出す隊長の後を追って、エレ達も続く。そんなエレの胸中では、得体の知れない薄暗い霧が、

ぐるぐると渦を巻いていた。

いつもならこういう時は、『気安く触るな』とそっけなくはねのける彼が、この女性には唯々諾々と従うままになっている。その事実で軽い苛立ちを覚える自分がいる事に、エレは戸惑うのであった。

アーシヤの旅籠は宿場町で最も大きな一軒で、三階建てになっており、一階には広い食堂がある。

決して高価すぎはしないが質の悪くない調度品が整った部屋を通り、広い浴場で旅の汚れを落として旅装から軽装に着替えた後、エレ達は食堂に集合し、夕食を取る事になった。

生ハムを乗せたガーリックトースト。牛のひき肉を卵でつないでよく捏ねた、歯ごたえ良いハンバーグステーキに、付け合わせは甘い人参のグラッセ。しゃきしゃきの水菜と春の新玉葱を、酸味の効いたドレッシングで和えたサラダ。飲み物には、南方で採れるオレンジを丸ごと絞ったジュース。アーシヤは『お代はいただくよ』と言いつつも、インシオンが顔見知りの縁で、食事は安く提供された。

しかし今、食卓についているのは、エレ、シャンメル、リリム、ソキウスの四人だけである。インシオンはアーシヤに腕を引かれて、カーテンを挟んだ個室へ連れて行かれてしまった。

顔見知りに再会したのだ、積もる話はあるだろう。だが、エレの心はざわざわと落ち着かない。

エレが知らないインシオンの一面を、彼女が知っている。遊撃隊の仲間達がインシオンと話す時には気にも留めていなかった事が今更引つかかって、ハンバーグを切り分ける手は止まり、ぶうたれたように唇を突き出すなど、セアクの姫という身分にあるまじき表情をしてしまう。

「インシオンが気になりますか？」

横から穏やかに声をかけられて、エレははっと現実に立ち返った。振り仰げば、ソキウスが眼鏡の奥の目をおかしそうに細めて、こちらを見つめている。

「い、いえ。そういう訳では」

しどもどしながら必死に否定し食事に向き直るが、無闇に突き出したフォークは、人参のグラッセを滑るばかり。

「あつはは、エレってわかりやすい」

シャンメルがけたけた笑いながらトーストを口に突っ込んで、咀嚼もそこそこに飲み下す。

「心配しなくても大丈夫」

リリムがいつもの淡々とした調子で、しかし諭すように語を紡ぐ。

「インシオンはそういう人じゃないから」

その言葉に、シャンメルとソキウスも深くうなづく。『そういう人じゃない』とはどういう意

味だろうか。彼が他人に対してなかなか心を許さないのは、傍から見てもよくわかる。遊撃隊の面々にも半歩以上距離を置いているのは、これまでの道程で把握した。しかし「心配」とは、リリムはエレが何を心配していると思つたのだろうか。

深い意味を探ろうとすると、頬が火照る。心臓が逸る。

動揺を押し隠す為に、エレはジュースのグラスを手にとると、一気に飲み下すのだった。

「連れが気になるかい？」

再会を祝して杯を交わそう、と言うアーシャの誘いを断りきれず、二人で個室に入ったものの、ちらちらとカーテンの向こうへ視線をやるインシオンを見かねたか、呆れ切つた声がかげられた。「まったく、女が目の前にいるってえのに、他の娘さんの事ばかり考えるなんて、あんたは相変わらずなつてないねえ」

向かいから答める台詞にはしかし、棘は込められていない。むしろ、手を焼く弟を面白がつて見守る姉のような声色だ。実際アーシャの顔には、含み笑いさえ浮かんでいる。

それもそのはずで、アーシャとインシオンの関係は、男女のそれというよりは師弟関係に近い。十三年前、英雄になって、急速に周囲の人間との関わりが広まり戸惑う少年に、彼の関係者が、『英雄なんだから箔をつけておくんだね』と、奇越した幾人かの女性の内の一人が、アーシャだ

った。

当時彼女はイシャナ王都にある高級娼館でも売れっ子の娼婦で、男を誘惑し貢がせる事にかけて彼女の右に出る女はいないだろうという、百戦錬磨の上玉であった。そんな彼女に、女に騙され利用されない為の知識を、みっちり叩き込まれたのだ。

「……そんなじゃねえよ」

まだ酒も飲めなかった若造の頃を知られている彼女の前で、白ワインの入ったグラスを傾けるのは、いささか不思議な気持ちでもある。殊更むつりした顔を作りながら、インシオンは葡萄酒の香り漂う酒を口に含んだ。たちまち、心地良い辛みが舌に触れて、喉を滑り落ちてゆく。

「あいつはすぐとんでもない事をしでかすから、目を離せないだけだ」

「おやおや」黒の瞳にからかうような光が灯り、アーシャがころころ笑いながら小魚の唐揚げを口に放り込んだ。「人を突き放して生きる『黒の死神』とは思えない台詞だねえ」

見透かされている。インシオンの眉間の皺が一層深くなった。海千山千の彼女の前には、隠し事など一切の無駄だと思ひ知る瞬間だ。

「あの、赤銀髪のお嬢さんだろ。とても遊撃隊員には見えない、事情がありそうな」

ワインを一口含んで、アーシャは頬杖をつき、

「ねえ、インシオン」

我が子に言い聞かせる母親のように、穏やかな口調で彼女は告げた。

「人と人の出会いに、無駄な縁なんてひとつたりとも無いんだよ。どんなに腹の立つ相手でも、そいつと結んだ関係は、いつか必ず何かの実になる」

だから、と言葉が重ねられる。

「もっと周りの人間を大事にしな。失ってから大切さに気付いて後悔するのが、一番苦しいんだ」
アーシヤはかつてイシヤナ将官の妻だったと、いつかどこかで聞いた記憶がある。傍目にも微笑ましいおしどり夫婦だったが、夫が戦で呆気無く逝き、家は没落して、アーシヤは娼婦に身を墮とすしか無かったとも。そんな彼女だからこそ、その言葉は強い力を持って迫ってくる。

そして、自分があの少女をどう思っているかも、身につまされるのだ。

守られるだけの弱々しいお姫様だと思っていたのに、戦力として扱えと宣言し、それだけの力を見せた。迷惑もかけられるが、それ以上に、そうすまいと必死にもがいてこちらの言葉を聞いて、背中を追いかけて来る。その健気な懸命さを、笑顔を守りたい。

それに彼女は憶えていないが、この出会いは初めてではない。再会なのだ。かつて守り切れず失ってしまった少女を、みすみす死に追いやりたくはない。一期一会などという、そんな簡単な言葉で終わらせたくないのだ。

「……言われなくてもわかってる、って顔だね」

グラスを握り締めるインシオンの、神妙に唇を引き結んだ表情を見たアーシヤが、ふっと笑みを洩らして、ワインを勢い良く干すのだった。

翌朝。

エレは同室のリムより早く目が覚め、身支度を整えて部屋を出た。そこではったりと出くわした顔に、目を丸くしてしまふ。

「……おはようございます」

「……ああ」

インシオンは、昨夜は何事も無かったかのように、いつものそつけない態度で応じて来た。まあ実際、アーシヤと何があつた訳でもないのだろう。それでも、心がむずむずして仕方無い。そつと両手で胸をおさえると。

「一緒に散歩でも行くか」

告げられた言葉に、一瞬意味を解釈しかねてぼかんとしてしまふ。しかし理解すると、胸の澱みを押し流すような喜びの大波が訪れた。

「——はい！」

満面の笑みでうなずき返す。今度はインシオンが呆氣に取られる番だった。

「そんなに嬉しいか？ 変な奴」

インシオンが苦笑を浮かべる。そんな表情さえ今のエレには心弾んで仕方が無い。

彼が背を向け歩き出す。エレはどきどき騒ぐ心臓におさまれ、と命じながらも、緩む口元をおさえきれないまま、軽い足取りで彼の後を追うのだった。

（二〇一五年秋 Text—Revolutions 第2回 公式アンソロジー—寄稿）

『アルテアの寄せ鍋』

1 エレ、悩む。

インシオン遊撃隊と共にイシャナ王都を目指す日々の、とある一日。

遊撃隊の隠れ家のひとつに辿り着き、夕食当番を任されたエレは、その献立に頭を悩ませていた。

五人も人間が集まれば、その好き嫌いは多岐に渡る。果たして全員が納得して美味しく食してくれるものを作れるだろうか。

インシオンも、シヤンメルも、リリムもソキウスも、好みはそれぞれかなり違いそうな事は、これまでの道程で薄々気づいている。

(どうしましょうか)

街で買った新鮮な食材を調理台の上に並べて、エレはぼりぼり頬をかき、そしてひとつの結論に至った。

(皆さんに、訊いてみても良いかもしれませんね)

2 好き嫌いの無い人の場合

「えー、何でもいいよ。大体、嫌いなもの探す方が難しいって」

シャンメルからは想定内の答えが返って来た。何が出ても嬉しそうにがつつく少年の様子から、大方わかりきっていた事だ。

「エレはなまこって見た事ある？ 見た目はすごいグロテスクだけど、野菜と混ぜてコールスローにするると美味しいの」

「なまこ」

エレはばちくり瞬きをする。海から離れた大陸北方に位置するセアクで育ったエレには、なじみの無い食材だ。だが、好き嫌いの無いシャンメルが言うのだから、それはそれは美味しいのだろう。

「わかりました。今度の参考にしますね」

シャンメルが「冗談半分なのにー」と小さく笑った事に気づかず、エレは大真面目にうなずいた。

3 事情持ちの人の場合

「甘酸っぱいものが好き」

リリムは菓草よを選ぶ手を止めて振り返ったかと思つと、にこりともせず言い放った。

「ベリー系なら大体食べられる。柑橘類は駄目」

言われてエレも、そうだな、と思ひ至る。大陸中央で生産されるベリーは、ある程度安定した糖度の物が収穫できるが、柑橘類は改良途中の物が多く、当たり外れが大きい。日々、遊撃隊の面々の為に菓草を選んで茶を淹れているリリムが言うのだから、結構なこだわりなのだろう。彼女の為にも、これは大いなる参考にすべきだ。

「ありがとうございます、考えますね」

エレは知らない。リリムの言葉の裏に込められた、「食べられる」「駄目」の深い意味を。上面の言葉通りではない事を。

4 腹黒さんの場合

「カレー味ですね」

ソキウスは、眼鏡の奥の灰色の目を細めて、ゆるく笑んだ。

「香辛料たっぷりあの味付けがあれば、大抵のものは美味しくいただけます」

落ちていた雰囲気の彼からは想像もつかない、意外な好みだ。エレが目を丸くすると、彼は更に口の端を持ち上げて、続く言葉を紡ぎ出した。

「香辛料は毒にも薬にもなります。用法を過ぎた量を投与すれば、自然死に見せかけて暗殺する方法も存在します。使い道は沢山あるのですよ」

ふ、ふ、ふ、と、なんだか恐ろしい含み笑いを洩らしながら物騒な発言を放つソキウスは今今は、口は笑っているが目が笑っていない。

「よ、よくわかりました！」

エレは慌てて頭を下げ、その場を逃げるように去った。

5 あの人の場合

エレの質問を聞いたインシオンは、たちまち半眼になり、腕組みしてエレを見下ろして来た。「そんなもん訊いて何だってんだ。俺達は野宿で草だって食うんだ、いちいち食い物にケチついたりしねえよ」

「でも」

どうせ食事をするなら皆に喜んで、楽しく食べて欲しい。エレはそう思ったのだ。しゅんとしてうつむくと。

「……鶏肉」「え?」

ぼそりと声が降って来たので、顔を上げる。

「鶏肉が好きだ。安くて腹一杯になる」

エレがきよとんと見つめると、赤い瞳が、いつになく優しい光を宿してこちらを見ている。

「お前の好きなようにやれ。何だって食ってやるさ」

胸がどきどきする。嬉しさに包まれて、エレは「はい!」と大きくうなずいた。

6 そして出来上がり。

ぐつぐつと煮えたぎる鍋の中身は、飴色を通り越してやや黒みがかっている。中に何が入っているか、上から見ただけではよくわからない。

「皆さんの意見を取り入れた結果、セアクでは一般的な、寄せ鍋にしてみました」

食卓に着いて、発するべき言葉を失ったまま鍋を凝視するインシオン達四人を前に、エレは誇らしげに胸を張った。

「味つけはカレーで、皆さんの好きそうなお肉やお魚、野菜に果物やお菓子を入れています！」

「何か今、入っちゃいけない物が聴こえたんだけど」「聴こえた」

シヤンメルとリリムが顔を引きつらせ、ソキウスが責めるような視線でインシオンの方を向く。

「好きなようにやれ」と言ったそうですね」

インシオンは諦めの吐息をついて、「おい」とエレを呼ぶ。

「インシオンでそういうのを何て呼ぶか知ってるか」

彼女が不思議そうに小首を傾げるのを見やって、英雄はらしくなくがっくりと肩を落とす、吐き出すようにその名を告げた。

「……『闇鍋』だ」

それでも全頁が、『アルテアの魔女』お手製の奇跡の味に、鍋を空にするまで食したのは、余談である。

終われ!!

二〇二六年五月五日 COMMITIA116 ペーパー掲載

当サンプルは、一部内容です。

なお、現時点でWeb版には収録予定の無いエピソードが、いくつかあります。

七月の樹頼 たつみ 暁

URL:<http://july.main.jp/>

Twitter:tatsumisn